

地上であそべ

前田菜月

漆工専攻の院生になった春、私は鬱屈としていた。この狭い枠の中に行儀よくいるのはつまらない。

そしてお金もなく半年休学してお金を稼いでいた。そんな時、井上先生が雨季の西アフリカのブルキナファソから帰ってきて、報告会を開いた。その中でカッセーナの家の壁画の写真を見た瞬間に来年の乾季家づくりの季節にブルキナファソの壁塗りを習いにいこうと決めた。

3月上旬ブルキナファソに向かった私は、英語が通じないこと、日中の気温が50℃になることなどを体感しつつ、現地で支援のお仕事をされている日本人の方に大変お世話になりながら、なんとかカッセーナ地方までたどり着きカイエおばあさんに壁画を習った*。

早朝まだ涼しい時間帯からカイエおばあさんと牛糞まみれになりながら壁塗りをする時間。家を建てるのは男性の仕事で、壁塗りをするのは女性の仕事のようなだった。昔は親戚の女性達で年に一度集まって歌いながら壁塗りをしていたらしい。今は集まった人の食事を用意したりすることが金銭的になど難しいそうだ。その後カッセーナ3日目に食中毒になり急遽首都ワガドゥグに引き返す。自分の内臓の中で大蛇が暴れているような初めての痛みの体験。滞在中にマリでクーデターがあり、トンブクトゥーの遺跡を見に行くのはやめにして、ブルキナファソのボボデュラソからロロベニ遺跡へ。ラテライトの酸化鉄の塊のような石が蜂蜜とカリテバターを糊として高く積まれて高い壁となり遺跡をぐるっと囲む。細胞壁のような、なんとなく知っている懐かしい場所のような不思議な遺跡だった。この重たく硬いラテライトの石をくっつけているのが食べ物であることがうれしくて、帰国報告の泥茶会ではラテライト石のようなクッキーに蜂蜜バターをぬるお菓子を作った。土で家を建てて、牛糞と土で文様を描いて、ポットを作って、石を食べて。ブルキナファソの市場では薄ピンク色の落雁のように小石が食品として売られていた。ビタミンがあるのかな？カッセーナで地面にトーを乾かすために広げている様子も本当によかった。

ブルキナファソでの3週間。地上での環境に応じてなんとか工夫して生きていること、生活と生存と芸術が分離されていない世界に身を置いて、分離され価値付けられる芸術(当時は工芸分野)を学んでいる身からすると、憧れと同時にすごくほっとする感覚を得られた。

生活や生存のようなすごく密接した位置にすごく広大な工芸や芸術の世界があると体感できた。分離することは文脈付けたり、価値づけるには必要な要素だが、そのせいで世界を狭めてしまっていることに自覚的でいたい。つまり、遊べるフィールド、ヒトが生存する地上はまだここにもある。

わたしにとってつちのいえは、はみだしものの遊び場のような場所。

つちのいえに来るとそこには大地と必死にあそぶ人がいる。時折訪れる先人達のような人々とも交流できる不思議な場所。それは、いつも押し込められている枠の上に登ってすこーんと抜けた空間で偶然誰かに会えたり、1人でいたりする場所でした。

*その時に習った壁塗りのレシピは以下のサイトに詳しく書いています。

『フィールドで出会う風と人と土2』p.52「ティエベレの壁塗りのレシピ」

https://livingmontage.com/educational-resource/ueru_tanaka/download/kazehitotsuchi_2.pdf



ブルキナファソのティエベレでカイエおばあさんに壁画を習う(2012年3月)



ロロベニ遺跡(ブルキナファソ)



地面にトーを広げて乾かす



つちのいえでの泥の茶会 2012年7月29日



2008~2012年参加 2015年京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻修了

最近の活動:2018 人工的品(@KCUA 京都)、2021 人工の森(アルティーホール 会期:3/2~3/31)